



厚別区老人クラブ連合会
会長 高澤 英治さん

みんながつながっているという自信

老人クラブといえば、現役生活を終え、人生の余暇の時代を、趣味や旅行など仲間と楽しみながら健康的に過ごすところ…。そして、ボランティア活動による社会貢献。そんなイメージが一般的ではないでしょうか。

しかし、会員134人を誇るもみじ台の老人クラブ「みずほ楓会」の会長であり、厚別区老人クラブ連合会の会長でもある高澤英治さん(79歳)は断言します。「高齢者が半分近くもいる今の社会、老人クラブはまちづくりの主役の一翼ですよ。」

昨年9月の北海道胆振東部地震。厚別区でも全域が停電し、一部地域では断水も発生。住民は混乱しました。そんな中、みずほ楓会のネットワークが活きました。全員無事だという情報がすぐに会員間で流れたといいます。

高澤さんは「会員同士で、気になる人の家を見に行っただけで安否を確認し、ちょっとした困り事はすぐその場で解決したようです。日頃の関係から自然に行われたことです。私が号令をかけたわけではないけれど、うちの会員はみんながつながっているという自信はありました。」と胸を張ります。会員の多くが住むみずほ自治会(618世帯)も、老人クラブのネットワークの延長上で安否確認が行われました。

積極的に外に出ていくクラブに

高澤さんがみずほ楓会の会長となって8年。もみじ台地区は人口の半分近くが65歳を超えるまちになりました。「だからこそ高齢世代が地域コミュニティを担う必要がある。老人クラブにできることは少なくないはずで

つながり、支え合う私たち

毎年のように猛威を振るい、大きな被害をもたらしますが、支え合うことで被害を小さくすることははじめ、いざというときに大きな助けとなる絆づく

す。」もともと会員同士の繋がりが深いクラブでしたが、人と人とのつながりがさらに育まれるよう、魅力づくりを意識してクラブを運営してきました。フロアカーリング、詩吟、大正琴などのサークルを次々に立ち上げて、会員を増やすとともに、会員同士の絆を深め、お互いに気掛け合う関係を築いてきました。

また、会員有志を募って「もみじ台チーム・ボランティア」を結成。日常生活に困り事を抱える方への支援や福祉施設でのボランティア活動など、クラブ内外を問わず支え合い活動を広めています。地域で行われるイベントの情報を積極的に流し、多くの会員が参加することで、住民同士がつながる機会を増やしたり、次世代を担う子どもたちが地域に愛着を持てるよう、小学校や児童会館との連携も積極的に行っています。

高澤さんの思いは自分のクラブの活動だけに留まりません。昨年10月にもみじ台地区自治連(東健二郎会長)の主催で行われた熊の沢川のサクラ植樹事業には、もみじ台地区老人クラブ協議会の会長として、川沿いの2つの老人クラブや小学校に呼び掛け、多くの住民や子どもたちが参加しました。小学校のサタデースクールにも、老人クラブ、地域住民として積極的な提案をしています。

お互いに尊重し合って地域貢献

現役時代は仕事柄、全国各地を飛び回っていたという高澤さん。妻のりり子さんは、家を守り、子育てをしながら消防団や青少年育成委員を30年以上続けてきた地域活動の先輩です。

高澤さんが定年になって老人クラブに入った最初のころは「あまりやり過ぎないで。」とブレーキをかけられることもありましたが、最近はお互いに相手の活動に対して敬意を払い、口出しはしないとします。「好きにやらせてもらうこと、好きにやらせてあげること、これが長続きの秘訣です」と笑います。

「みずほ楓会の会員1人が5人の高齢者を見守れば、自治会内の高齢者すべてを見守れる計算になります。災害時の支え合いでも福祉のまちづくりでも、老人クラブが担える部分はまだまだあるはず。」にこやかに、そして大胆に語る高澤さんの言葉の先に、老人クラブの未来の形が見えました。

す自然災害。私たちに自然災害を止めることはできません。日頃からつながり合うことで、災害時をりを実践している人・団体をご紹介します。

レジェンドの背中を見て

厚別区の6地区それぞれに地区分団が設立された2008年、佐藤厚子さん(71歳)は日本赤十字社札幌市赤十字奉仕団(日赤奉仕団)厚別中央分団に入団しました。

当時の分団長は丸橋美枝子さん。通算活動年数44年を数える日赤のレジェンドです。丸橋さんの背中を見ながら日赤奉仕団のことを学んだ佐藤さんは、2011年に丸橋さんの後任として分団長に就任し、8年目を迎えます。

今年9月には、札幌市赤十字奉仕団70周年記念表彰として、丸橋さんが社長感謝状、後輩の佐藤さんが金色有功章、さらに厚別中央地区分団も分団表彰を受章。連綿とつながる厚別中央地区分団の活動が評価されました。

日赤と町内会のパイプ役に

日赤奉仕団は、人道、公平、奉仕など赤十字の基本原則に基づき、災害救護や義援金募集、献血のPRといった幅広いボランティア活動に取り組んでいます。佐藤さんもこのような活動をしながら、北海道や札幌市全体での研修会にも参加し、災害時の救護訓練や炊き出し訓練などを学んできました。

こうした日赤奉仕団の活動は、町内会など住民組織との連携なくして進めることはできません。佐藤さん自身も町内会女性部、PTA、交通安全母の会などの活動を通して知り合った人脈を活かし、関係団体とのパイプ役となって日赤奉仕団を支えてきました。厚別中央地区町内会連合会(樋田並久会長)の研修には必ず声を掛けてもらい、災害時の避難支援や車いす介助などについて学びながら、町内会と日赤奉仕団と同じ認識で活動できるように心掛けてきたといいます。



札幌市赤十字奉仕団厚別中央分団
分団長 佐藤 厚子さん

知識や経験はみんなで共有

学んだ内容は分団長として仲間に伝えてきましたが、昨年の胆振東部地震を経験し、「自分たちが得た知識や経験を、より多くの人に知ってもらい、みんなで共有しなくてはいけない。使える情報でなくては意味が無い。」と考えた佐藤さん。昨年一般向けの学習会を始めました。「断水でも、紙おむつをトイレに敷けば、小用なら匂いを出さずに2~3回は用を足せる。」「チラシを折ってビニール袋をかぶせると、簡易なコップやお椀になる。」身振りを交えて熱心に伝えようとする姿は、「困ったときに、多くの人々が少しでも安心して過ごせるよう、持てる知識は余さずに伝えたい。」という想いにあふれています。

苦しんでいる人を救いたいという思いで全国的に活動する日赤奉仕団の「課題は認知度」という佐藤さん。赤十字というビッグネームに比べ、「奉仕団」という名のボランティアグループの存在は、あまり知られていないとは言えません。区内6つの分団をいい形で束ねて、厚別区の日赤としてより多くの場に登場し、地域の皆さんに頼られる存在になりたいですね。」と、佐藤さんは明るい笑顔で語ります。

「目が痛いであるとか、目が見えなくなってきたり、そうした中であつても、今が一番と、思つて暮らしていたらどうしよう。」

「今が一番」

介護付有料老人ホーム
「あつぱつ」の泉

介護付有料老人ホーム(特定施設)・サービス付高齢者向け住宅
〒004-0003 札幌市厚別区厚別東3条6丁目5-35 ☎011-897-6610